

往時の極彩色よみがえる

熊谷柴田家稲荷社

熊谷市上新田の上新田柴田家稲荷社の復元が完了し、報道陣に公開された。稲荷社を修復する作業は、行田市のもつくり大学横山研究室が実施。かつて社殿の彫刻に施されていた極彩色もよみがえった。21日午前10時〜午後3時まで、一般公開する。
(田付智大)



ものづくり大室 江戸中期の姿復元 横山研究

上新田柴田家稲荷社の復元が終わり、作業について施主の柴田忠雄さん(右)に説明する担当者の荒畑光希さん(熊谷市上新田)

初代が武田信玄の家臣だった柴田家は、帰農して江戸時代が始まる頃から上新田に居を構えていたとみられる。敷地内にある稲荷社は、江戸時代中期の1774年に建立された。大きさは、柱間の寸法が正面63センチ、側面56センチ、高さが3メートル20センチ。覆屋内に祭られていたが、倒壊寸前なほど激しく傷んでいた。



作業前の傷みが激しい上新田柴田家稲荷社(ものづくり大学横山研究室提供)

現在の15代当主柴田忠雄さん(93)から修復を依頼された横山研究室は、昨年2月から今年4月まで、14カ月ほどかけて作業に当たった。稲荷社は棟札から、内田清八が棟梁(とつりよつ)を務めたことが分かっている。清八は市内にある国宝の妻沼聖天山歓喜院本殿の建立を指揮した林兵庫正清の弟子。清八の名は、歓喜院の北側妻飾り懸魚(けぎよ)からも見つかっている。そのため、欠損部の再現は歓喜院を参考にした。

稲荷社の脇障子は左側に二ワトリの彫刻が施されていたが、右側は欠損していた。修復全般を担当した大学院修士2年生の荒畑光希さん(23)は、歓喜院にある彫刻のポーズを参考に右側を再現。当初は彩色の復元は予定していなかったが、残っているわずかな塗料を顕微鏡で分析するなどして、使われた色や漆塗りの手法を解き明かした。荒畑さんは「彩色の復元が最も苦労した」と振り返る。

約250年前の鮮やかな姿を取り戻した稲荷社に、施主の柴田さんは「驚くほどきれいになった。地域の文化財でもあるので、しっかり守りたい」と継承を誓う。復元を監督した同研究室の横山晋一教授は「当時の世相も見える貴重な建物。市の文化財として指定される価値があるのではないかと語った。」



2025年 7月18日 金曜日
(令和7年)

11 稲荷社 極彩色を復元

熊谷市上新田の上新田柴田家稲荷社の復元が完了。作業は、ものづくり大学横山研究室が実施した。かつて社殿の彫刻に施されていた極彩色もよみがえった。

